

次世代を担うアーティスト・デザイナーを発掘、応援する

「Tokyo Midtown Award 2014」結果発表

受賞作品は東京ミッドタウン プラザ B1F オープンスペースにて展示

10月17日(金)～11月9日(日)

東京ミッドタウン(事業者代表 三井不動産株式会社)は、「JAPAN VALUE(新しい日本の価値・感性・才能)」を創造・結集し、世界に発信し続ける街”をコンセプトに街づくりを進めています。その活動の一環として開催中の、「Tokyo Midtown Award 2014」アート・デザイン両部門において、この度、計1,429点の応募作品の中から、グランプリ2作品を含む受賞作品14作品が決定しました。

<Tokyo Midtown Award 2014 グランプリ受賞作品>

<アートコンペ>テーマ:なし

作品名:『群雄割拠』(ぐんゆうかつきよ)

受賞者:原田 武(はらだ たけし)



<デザインコンペ>テーマ:和える

作品名:『和網』(わあみ)

受賞者:hitoe(ひとえ)



今年で7回目となる本アワードは、<アートコンペ><デザインコンペ>の2部門で実施。2部門総計1,429点の応募作品の中から、<アートコンペ>では、小さな生き物が住む、長い時間を経たコンクリートブロックの壁を金属で精巧に表現し「身近な、日々の感動」を示した『群雄割拠』(ぐんゆうかつきよ)、<デザインコンペ>では和柄が編まれた金網で、料理のシーンに日本の伝統を感じる提案をした『和網』(わあみ)がグランプリに選出されました(受賞作品の詳細は次頁以降をご参照ください。)

尚、受賞作品14点は、10月17日(金)から11月9日(日)までの約1ヵ月、東京ミッドタウンのプラザB1F オープンスペースにて展示します。また、11月3日(月・祝)まで、来街者の一般投票で人気作品を選出する「オーディエンス賞」も実施。結果は11月7日(金)に東京ミッドタウン・オフィシャルサイトにて発表いたします。なお、東京ミッドタウンでは10月17日(金)から11月3日(月・祝)まで、秋のデザインイベント「Tokyo Midtown DESIGN TOUCH 2014」を開催しておりますので、併せてお楽しみください。

■掲載時の一般の方のお問い合わせ先■ 東京ミッドタウン・コールセンター TEL: 03-3475-3100

■東京ミッドタウンホームページ■ www.tokyo-midtown.com

■Tokyo Midtown Award ホームページ■ <http://www.tokyo-midtown.com/jp/award/>

＜アートコンペ＞ テーマ:「なし」

今年度＜アートコンペ＞では作品のテーマを設けず、東京ミッドタウンの街路に設置することを意識して制作いただき、サイトスペシフィックな作品を募集しました。応募者自身が設置場所を選び、自由に作品を提案できることから、昨年を上回る 357 点の応募があり、様々な手法で表現された作品が多く集まりました。その中から、木彫や金属などの立体作品やテキスタイル、写真など、表現豊かで多彩な 6 作品が最終審査に残りました。

6名の入選者には制作補助金 100 万円を支給し、10 月 6 日(月)の最終審査を経て、各賞が決定しました。グランプリ受賞者は、University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History(※1)が実施するアートプログラムへ招聘されます。

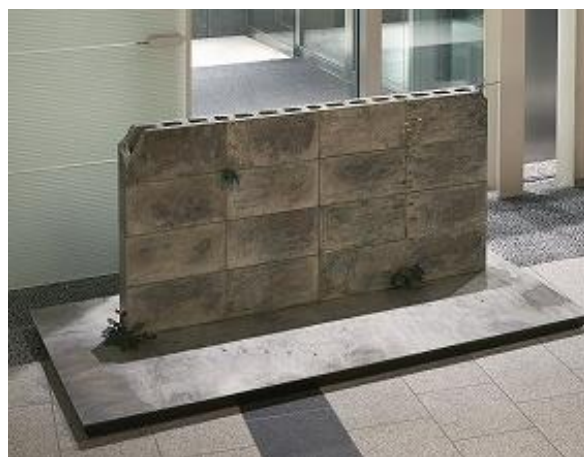
＜グランプリ＞

作品名: 『群雄割拠』(ぐんゆうかつきよ)

受賞者: 原田 武 (はらだ たけし)

＜作家コメント＞

建築されてから時間が経過したコンクリートブロックの壁、一部は崩れ雑草が生えていた。その草や壁には小さい生き物達が住んでいる。子どものときには身近で何気ない所から発見をして喜びを感じていた。年を重ねていくにつれてそうした発見や感動は無くなっていく。そんな日常に金属によって作られた塀や虫や花によって観察と発見をする喜びを与えたい。



＜アートコンペ＞概要

テ — マ : 「なし」

応募期間 : 2014 年 5 月 15 日(木)～2014 年 6 月 5 日(木)

審査方法 : 1 次審査(書類審査)→2 次審査(模型によるプレゼンテーション)→最終審査

審査員 : 児島やよい(フリーランス・キュレーター/ライター)

清水敏男(東京ミッドタウン・アートワークディレクター/学習院女子大学教授)

土屋公雄(彫刻家/愛知県立芸術大学教授/武蔵野美術大学客員教授)

中山ダイスケ(アーティスト/東北芸術工科大学グラフィックデザイン学科学科長)

八谷和彦(メディア・アーティスト/東京藝術大学准教授)

協 力 : TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE

後 援 : University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History (※1)

賞 (賞 金) : グランプリ(1 点) _____ ¥1,000,000

準グランプリ(1 点) _____ ¥500,000

優秀賞(4 点) _____ ¥100,000

※別途、入選者 1 人、または 1 組につき、制作補助金 100 万円を支給

※1 University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History について

＜アートコンペ＞グランプリ受賞者は、University of Hawai'i at Mānoa の/Department of Art and Art History が実施するアートプログラムに招聘いたします。歴史ある本プログラムへは、これまで数多くのアーティストや学者が招かれ、ハワイの芸術文化に触れながら、各種のアートプログラムを行っています。受賞者には、実際にハワイに滞在し、ハワイ大学のアートプログラムに参加しながら作品を制作する機会が与えられます。

グランプリ作品詳細及び準グランプリ、優秀賞、審査員特別賞の作品については、添付参考資料をご参照ください。

＜デザインコンペ＞ テーマ:「和える」

今年の＜デザインコンペ＞のテーマは、「和える」。「和える」とは、何かと何かを合わせ、新しい価値を生み出すこと。日本ならではの技術や素材を活かし、日本のモノ作りに新しい息吹を吹き込むことができるデザインを募集しました。結果、1,072 点の応募があり、昨年のグランプリ作品「MID DAY」に続く、イベントを提案する作品や、海苔や味噌といった日本ならではの食材、お菓子などに新たなデザインのエッセンスを「和えた」作品が多く見られました。

“デザイン力”、“提案(プレゼンテーション)力”、“テーマの理解力”、“消費者ニーズの理解力”、“商品化の可能性”を基準に応募シート(プレゼンテーションシート)を審査後、意匠権調査を経て、グランプリ・準グランプリ・優秀賞(各 1 点)、審査員特別賞(5 点)の計 8 作品が決定しました。グランプリ受賞者は、アジア最大の総合デザインイベント「Business of Design Week(BODW)」(※1)に招待されます。また受賞作品には、今後継続的に商品化等のサポートを行う予定です。

＜グランプリ＞

作品名: 『和網』(わあみ)

受賞者: hitoe (ひとえ)

＜作品コンセプト＞

魚やステーキ、野菜など毎日の食卓にあがる様々な焼き物に、彩りが感じられる模様が入ったらどうだろうか。味わいは、味覚だけでなく視覚でも感じるもの。日本ならではの和柄を焼き目にして和えることで、旬を楽しめたらいいなと思いました。普段と同じ食材でも、新たな味わいをつくり、个性的で美しい一品をお料理のレパートリーに加えられる、和の焼き網です。



＜デザインコンペ＞概要

テ — マ : 「和える」

応募期間 : 2014 年 7 月 18 日(金)～8 月 19 日(火)

審査方法 : 書類審査

審査員 : 小山薫堂(放送作家/脚本家)

佐藤 卓(グラフィックデザイナー/佐藤卓デザイン事務所 代表取締役)

柴田文江(プロダクトデザイナー/Design studio S 代表)

原 研哉(グラフィックデザイナー/武蔵野美術大学教授/日本デザインセンター代表)

水野 学(アートディレクター/クリエイティブディレクター/good design company 代表/

慶應義塾大学特別招聘准教授)

協 力 : 東京ミッドタウン・デザインハブ/アジアデザイン賞 (Design for Asia Award) (※2)

賞 (賞 金) : グランプリ(1 点) _____ ¥1,000,000

準グランプリ(1 点) _____ ¥500,000

優秀賞(1 点) _____ ¥300,000

審査員特別賞(5 点) _____ ¥50,000

※受賞後、商品化のサポートを提供

※1 <デザインコンペ>グランプリ受賞者ご招待、海外デザインイベント視察先 Business of Design Week(BODW)について

<デザインコンペ>グランプリ受賞者を、香港で開催される「Business of Design Week 2014」に招待します。「Business of Design Week 2014」は、香港デザインセンターが主催するアジア最大のデザイン総合イベントで、現在の社会やビジネスにおいてデザインが重要になるという考えに基づき、革新的で優れたデザインを振興するとともに、デザイナー達に活力を与える場を提供しています。

アジア市場でデザインによって商業的成功をおさめた企業に対して授与される「アジアデザイン賞(DFAA)」も選定します。

※2 <デザインコンペ>協力機関: アジアデザイン賞 (Design for Asia Award) について

香港デザインセンターが主催するアジアデザイン賞(DFAA: Design for Asia Award)は、レッドドットデザイン賞、iF デザイン賞やグッドデザイン賞と並び「世界のデザイン賞」と評価され、飛躍的な成長を続ける中国を含むアジア市場にフォーカスしたユニークなデザイン賞です。

グランプリ作品詳細及び準グランプリ、優秀賞、審査員特別賞の作品については、添付参考資料をご参照ください。

東京ミッドタウン・オーディエンス賞

10月17日(金)の授賞式にて発表する<アートコンペ>、<デザインコンペ>の受賞作品は、10月17日(金)～11月9日(日)まで東京ミッドタウン・プラザ B1 F 展示スペースにて展示されます。また、東京ミッドタウンのデザインイベント「Tokyo Midtown DESIGN TOUCH」期間中の11月3日(月・祝)まで、同会場で来街者の一般人気投票を実施し、「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」を決定します。

尚、投票された方の中から抽選で10名様に、「Tokyo Midtown Award」デザインコンペから商品化され人気商品となっている以下の4商品の中から、ご希望の商品ひとつをプレゼントいたします。



▲オーディエンス賞投票箱イメージ



▲昨年の投票の様子

**東京ミッドタウンオーディエンス賞
プレゼント対象商品**

- ① 富士山グラス(2008年受賞)
- ② 縁起のいい貯金豚[きんとん](2011年受賞)
- ③ okokoro tape(2008年受賞)
- ④ 歌舞伎フェイスパック (2008年受賞)

※アートコンペ、デザインコンペの各受賞作品画像は、以下の URL よりダウンロードいただけます。

http://www.tokyo-midtown.com/press/index_press.html

Tokyo Midtown Award 2014 受賞作品

<アートコンペ> テーマ:「なし」

■ グランプリ

受賞作: 『群雄割拠』(ぐんゆうかっきょ)

受賞者: 原田 武 (はらだ たけし)

略 歴: 金属造形家/広島市立大学大学院芸術学部造形計画専攻修了。名古屋市生まれ、広島市在住。



<作家コメント>

建築されてから時間が経過したコンクリートブロックの壁、一部は崩れ雑草が生えていた。その草や壁には小さい生き物達が住んでいる。子どものときには身近で何気ない所から発見をして喜びを感じていた。年を重ねていくにつれてそうした発見や感動は無くなっていく。そんな日常に金属によって作られた塀や虫や花によって観察と発見をする喜びを与えたい。

■ 準グランプリ

受賞作: 『TODAY』(とうでい)

受賞者: 加藤 立 (かとう りゅう)

略 歴: フリーランスデザイナー/東京藝術大学美術学部建築科卒。愛知県生まれ、東京都在住。



<作家コメント>

「そのとき街で通り過ぎた一台の車のナンバーが自分の誕生日と同じだった。」

※この作品は、期間中毎日作家が写真を入れ替えます。作家のホームページにも掲載されていますのでぜひご覧ください。(www.ryukato.com)

■ 優秀賞

受賞作：『Empty freezer (m12)』

(えんぷてい ふりーざー)

受賞者：大塚 亨(おおつか とおる)

略歴：美術家／仏像彫刻家
東京藝術大学大学院美術研究科 修了
岐阜県生まれ、神奈川県在住



<作家コメント>

仏教の教えにある「無常」(どんなものにも始まりと終わりがあるということ)。この世が無常である限り、仏像でも、プラパック等の使い捨てのものでも同じようにいずれは朽ちていくものではないか。しかし、実際は仏像、使い捨てのものは分けられていく。仏像と同じ彫刻技法で作られたプラパック等から、いままでの価値観に疑問を提示できたらと考えている。

■ 優秀賞

受賞作：『明日へ変わる』(あしたへかわる)

受賞者：小林 万里子(こばやし まりこ)

略歴：テキスタイル作家
多摩美術大学大学院修士前期課程
デザイン専攻テキスタイル研究領域 修了
大阪府生まれ、埼玉県在住



<作家コメント>

昨日の私と今日の私は全く同じではない。自分という存在は変化し続ける流れそのもので、変わらずそこに在り続ける事は不可能だ。現代社会はこの生命の流れに似ていると私は思う。日々生産される多くの物や情報の代わりに、失われるものもまた同じだけある。変わりたいと願う自分がいて、変わらないで欲しいと思う風景があつて、変わり続ける自然の流れがある。私達の矛盾した気持ちとは裏腹に、生命はただ真っ直ぐに、明日へ変わる。

■ 優秀賞

受賞作：『The other』(じ あざー)

受賞者：住田 衣里(すみだ えり)

略歴：愛知県立芸術大学大学院
美術研究科彫刻領域 在学中
名古屋市生まれ、在住



<作家コメント>

モチーフのハイヒールは都会で生き生きと暮らす女性のイメージの投影である。この作品の最も重要なストーリーは「社会に対し、憤った女性が履いていた片方の靴を衝動的に投げ、ふと、我に返った時にもう片方の靴を見たら、靴のヒールが獣の足になっていた。」というもの。ミッドタウンに設置することで、都会で生きる人のスタイリッシュさと人間の持つ動物的な本能の両面を映し出す「鏡」の役割を担うと考える。

■ 優秀賞

受賞作：『欲玉』(よくだま)

受賞者：山田 弘幸(やまだ ひろゆき)

略歴：アーティスト。高校卒業後、刺青の彫師を経て、30代から仏画や絵画を中心に制作。
香川県生まれ、大阪市在住



<作家コメント>

私は色、形、性質も違う個が雑多に混ざり合い、その集合体内部で勝手に出来上がる秩序や構造に美を感じる。集合体の外形を創るのが国家や世界秩序。違いが有りながらも一つの球体(地球)を共有し皆、各自の欲に向かって与えられた生を一生懸命生きている。人間の欲望を一枚の食パンに見立てそこに飛びつく人々を卵に群がる精子のように我々が生きている今の時代を可視化した。東京ミッドタウンの軒下を奉る杉玉をモチーフに『欲玉』と題した作品。



■ 児島 やよい／Yayoi KOJIMA

(フリーランス・キュレーター／ライター／慶応義塾大学、明治学院大学非常勤講師)
今年テーマの枠をはずしたので、表現のメディアや手法に広がりが出て、今までにないタイプの作品が見られました。コンセプトだけ、技術や手わざだけでは作品として認められない。さらに現場での空間処理と判断、人とのコミュニケーションも必要、という、まさにアーティストが直面する課題が凝縮したコンペです。そのすべてに直面し、展示した作品へのさまざまな反応をライブで受け止めた6人の方々が、今後活躍されることを確信しています。



Photo by Herbie Yamaguchi

■ 清水 敏男／Toshio SHIMIZU

(東京ミッドタウン・アートワークディレクター／学習院女子大学教授)

今年テーマを主催者から提案しなかったが、これは参加作家が自分でテーマを見つけプレゼンする、ということだった。最後に残った作家たちは、自分のテーマを語ることができたと思う。これまでと異なり工芸的作品が増えたが、工芸とアートとしてのコンセプトの接点に面白いものがあった。完成作品については、コンセプトの面白さに技術が追いつかないものもあったが、予想以上にすばらしいものがあり、今後の活躍に期待したい。



■ 土屋 公雄／Kimio TSUCHIYA

(彫刻家／愛知県立芸術大学教授／武蔵野美術大学客員教授)

これまでのテーマであった「都市」が外れたことで、それぞれ応募者が、主体的に「場」と交差するかたちで個々のテーマを設定し、作品イメージをつくり上げている。従って応募作品も、これまで以上に表現の幅が広く感じられた。今回最終選考に残った6名に共通する部分は、すでに独自の表現力・世界観を持ったところではないだろうか。さらに原田武の「群雄割拠」や大塚亨の「Empty freezer (m12)」には、メチエとしての技術的裏付けも感じられた。今年のアート作品は、じっくり近距離でも楽しんでいただけることだろう。



Photo by Miura Haruko

■ 中山 ダイスケ／Daisuke NAKAYAMA

(アーティスト／アートディレクター／東北芸術工科大学グラフィックデザイン学科学科長)

本来、アーティストは自由に制作すればいいでしょう。しかし、いったん「コンペ」という舞台に出すと決めたなら、今いちど、自分という作家の「良さ」について客観的になるべきです。本人も保証できない新しい挑戦や、むりやりなコンセプト探しなんて、日常のアトリエでやればいい。目線も素材も手法も異なる他人の表現と比較されるという、コンペの不条理を理解するならば、持ち込むべきはあなたの「良さ」しかないはずです。「まぐれ」はありません。



Photo by 米倉祐貴

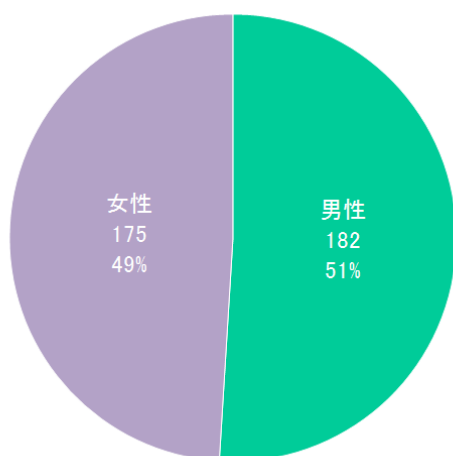
■ 八谷 和彦／Kazuhiko HACHIYA

(メディア・アーティスト／東京藝術大学先端芸術表現科准教授)

作家性のことを時々考える。私の考える作家性とは、例えばある作家…仮にAさんとするが、そのAさんの作った別の作品を見て、その作品に作家名などが全く表記されていなくても「あ、これはAさんが作った作品だな」となんとなく分かる、その「作品が持っているトーン」とも言うべきものが作家性だと考えている。もちろん、作品の露出が増えていけばその作品と作家の結びつきは強くなるのだが、たとえまだそれほどメジャーでなくても、また作品点数が少なくてもわかる「何かのトーン」を持っていたりする作家を発見するとうれしく感じるのだった。今回の選考でも、そのような作家を選んでよかったと思っています。同時に、観客の皆さんにはぜひこの作家達の作品を覚えていて欲しいです。きっとまたいつか出会いますから。

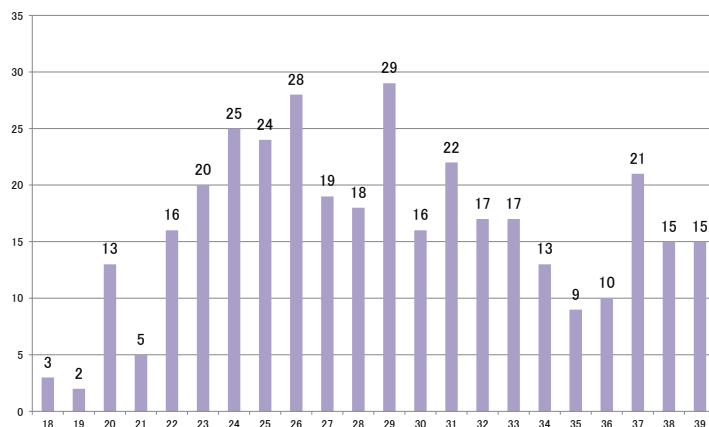
<アートコンペ> 応募者データ

● 応募総数男女比 (件)

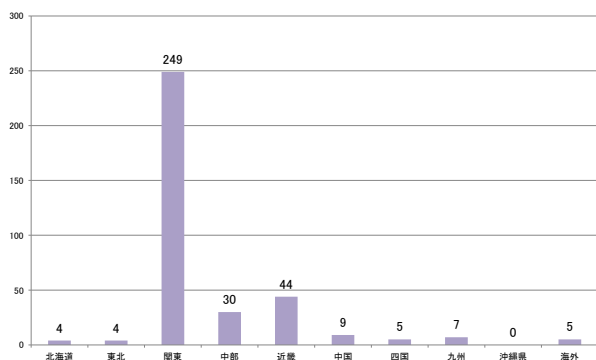


● 年齢分布 (件)

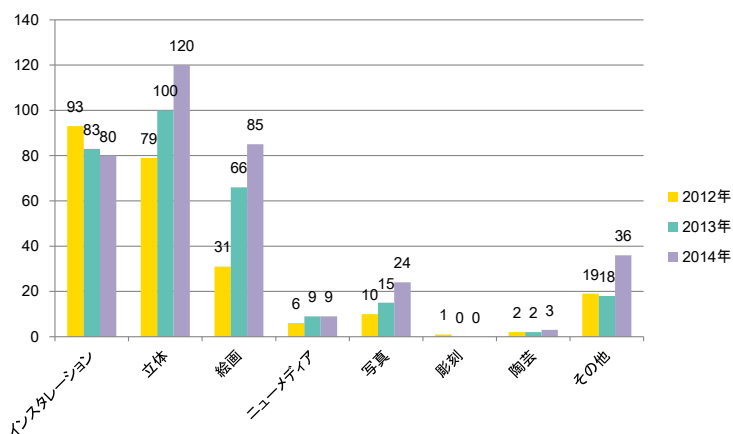
平均年齢 29 歳



● 地域別応募者数 (件)



● 分野別応募者数 (件)



■ 応募者数…357名(組)

■ 傾向…立体、絵画はもちろん、写真やテキスタイルなどが例年よりも増加しました。今回からテーマが自由になり、制作する作品のコンセプトを自ら考えていただくことになったために、多種多様な提案の応募が増えたと考えられます。

■ グランプリ

受賞作 : 『和網』(わあみ)

受賞者 : hitoe (ひとえ)

hitoe : 「人から人へ」をコンセプトに、活動するクリエイティブチーム

- ・榎本大輔(えのもと だいすけ)
デザイナー／福井県、東京のデザイン事務所を経て、28歳で渡英。
現地デザインオフィス「A-Concept」で経験を積み、2008年、デザイン事務所「侍グラフィックス」を設立。
- ・横山織恵(よこやま おりえ)
デザイナー／2001年、法政大学社会学部卒業後、
「侍グラフィックス」で現職。



＜作家コメント＞

魚やステーキ、野菜など毎日の食卓にあがる様々な焼き物に、彩りが感じられる模様が入ったらどうだろうか。味わいは、味覚だけでなく視覚でも感じるもの。日本ならではの和柄を焼き目にして和えることで、旬を楽しめたらいいなと思いました。普段と同じ食材でも、新たな味わいをつくり、個性的で美しい一品をお料理のレパートリーに加えられる、和の焼き網です。

■ 準グランプリ

受賞作 : 『鎧カッパ』(よろいかっぱ)

受賞者 : 85 (はちじゅうご)

略歴 : 桑沢デザイン研究所 在籍

85 : 桑沢デザイン研究所 2年生 4名で組んだクリエイティブチーム

- ・毎熊那々恵 (まいぐま ななえ)
ビジュアルデザイン科 2年／長崎県出身
- ・深田彩乃 (さわだ あやの)
ビジュアルデザイン科 2年／東京都出身
- ・杉山理子 (すぎやま りこ)
プロダクトデザイン科 2年／神奈川県出身
- ・根津唯 (ねづ ゆい)
プロダクトデザイン科 2年／宮城県出身



＜作家コメント＞

わんぱく盛り子ども達に、雨にも負けず風にも負けず元気に外を走り回って欲しい。という思いを、勇ましく駆ける武士に重ねた、子ども用のレインコートです。これさえあれば雨の日だって元気に外へ出陣できるはず！楽しい雨の時間を過ごして欲しいです。

■ 優秀賞

受賞作 : 『kokki』(こっき)

受賞者 : 山本悠平(やまもと ゆうへい)

略歴 : 2000年金沢美術工芸大学製品デザイン専攻卒業
会社員／電器メーカーのインハウスデザイナー
石川県出身。



＜作家コメント＞

世界共通で認識される4種類の国旗を形取った器です。

様々な国の料理を、様々な国の国旗に盛り付けることで、国境も文化も隔たりなく卓上で和えることができます。混ぜ合わさることで、普段口にしていない料理、あるいは普段気にしていない国のアイデンティティーを意識できるかもしれせん。

<審査員特別賞>

■ 小山薫堂賞

受賞作 : 『origami tale』(おりがみている)
受賞者 : 遠藤可奈子(えんどう かなこ)
略歴 : 2014年東北芸術工科大学デザイン工学部
グラフィックデザイン学科卒業/福島県団体職員



<作家コメント>

「origami tale」は、折り紙と物語を和えた作品です。紙を折る事で物語を追って展開していきます。紙という平面の物を折る事で立体へと変化させる。その変化の中に、いつもの折り紙とは違った驚きやワクワクした気持ちを感じてください。

■ 佐藤 卓賞

受賞作 : 『HARMONACA』(はーもなか)
受賞者 : wunit design studio 橋本&松井
(ゆにとつとでざいんすたじお はしもとあんどまつい)

wunit design studio 橋本&松井:

女性の視点からのデザインを想像する女性デザイン団体

- ・橋本莉緒 (はしもとりお)
椋山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科1年/石川県出身
- ・松井美名子 (まついみなこ)
椋山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科1年/愛知県出身



<作家コメント>

日本の伝統の和菓子であるモナカ。皮と中身というシンプルな構造から広がる味の可能性は無限大。そんなモナカをハーモニカにしてみました。見て食べて、味というハーモニーを奏でてみてください。

■ 柴田文江賞

受賞作 : 『婚鑑—KONKAN—』(こんかん)
受賞者 : 前田紗希(まえだ さき)
略歴 : 東京藝術大学美術研究科デザイン学科修士1年 在籍
愛知県出身



<作家コメント>

姓は自分の人生を表す大切な印です。大好きな2人が結ばれ新姓になった時、旧姓も残せる印鑑をつくりました。2人の絆を目で感じられ、1つで2種類の判を押せるのでとてもスマート。通常の印鑑よりぐらつかず、しっかり押せます。婚鑑は、パートナーとのいままでとこれからを和える印鑑です。

■ 原 研哉賞

受賞作 : 『金継ぎ煎餅』(きんつぎせんべい)
受賞者 : 泉美菜子(いずみ みなこ)
略歴 : 東京藝術大学美術学部デザイン科4年 在籍
神奈川県出身



<作家コメント>

陶磁器の補修技術である「金継ぎ」と、お米が原料のお菓子「煎餅」。日本に馴染み深いこの二つを「和える」ことで、割ってしまった欠片をもう一度継ぎ直したような煎餅を作った。本来割って食べるはずのものが、既に美しく補修されている。元通り直すだけでなく、ものの価値をさらに高める金継ぎの特徴を生かした、ユーモアをまじえながらも上品に日本の魅力を伝えることができるお菓子である。

■ 水野 学賞

受賞作：『おみく枝』(おみくじ)

受賞者：土屋寛恭(つちや ひろやす)

略歴：2011年千葉大学大学院工学研究科
デザイン科学専攻卒／会社員／大阪府在住



<作家コメント>

「料理に小さな驚きをそえる。」

受験や部活を頑張る子どものお弁当に。おせちといった特別な料理に。誕生会などのパーティに。1つの楊枝がちょっとした驚きを与えます。

<デザインコンペ> 審査員総評



photo by Hiromi Shinada

■ 小山薫堂 / Kundo KOYAMA

(放送作家 / 脚本家 / N35inc・(株)オレンジ・アンド・パートナーズ代表
東北芸術工科大学デザイン工学部企画構想学科長)

今回の「和える」というテーマは、本アワード史上、最も考えやすいテーマだったのではないかなと思う。なぜならば、発想とは既知と既知の掛け合わせから生まれることが多いからだ。全く新しいものを創作するのではなく、すでにあるものに違う要素を加えて新しいものを生み出す…これは日本人が最も得意とする創作スタイルではないだろうか。

ただ、「和える」の解釈が広過ぎる故に、和えることの必然性に乏しいものも多く見られた。最後に来年のアドバイスをひとつ！どんなテーマの時も毎年必ず出品されるのが、「蚊取り線香」と「カルタ」と「カレンダー」。この3つは、よほどの自信作でない限り、来年から出品しないほうがいいと思います。



■ 佐藤 卓 / Taku SATOH

(グラフィックデザイナー / 佐藤卓デザイン事務所 代表取締役)

「和える」は、近年の本アワードのテーマの中でもなかなかいいテーマだったと思う。考えてみると、日本は様々なものを昔から和えてきた。中国から入ってきた漢字と、その後生まれたひらがなやカタカナを和えてきたし、洋風な料理を様々な和えて「洋食」という日本ならではのジャンルもつくってきたし、食事の時は箸とフォークナイフの両方がテーブルに並ぶことも少なくない。外部から取り入れて、和えて独自のものに消化をすることが得意な国なのだ。ただ、Tokyo Midtown Award のいいところは、その深い意味を持ったテーマに対して、どこまで親しみやすく楽しいものに仕上げられるかというセンスが問われるところだ。今年の受賞作品も、なかなか面白いものに決まった。今後、どれが商品化されるのかが楽しみだ。



■ 柴田文江 / Fumie SHIBATA

(プロダクトデザイナー / Design Studio S 代表)

今年もアイテムとしては多様な作品が集まりましたが、多くの作品が、日本的なモチーフを今の暮らしに寄り添うモノに転化させた提案でした。私個人の目線としては、モチーフに留まらず技法や素材の特性を生かしてテーマに展開されたアイデアに面白さを感じました。また例年よりもビジュアル表現やレンダリング表現のレベルが高く、本コンペがデザイン学生をはじめプロのデザイナーの提案の場となりつつあることが見てとれ、来年以降の Tokyo Midtown Award に大きな期待が持てました。



■ 原 研哉 / Kenya HARA

(グラフィックデザイナー / 武蔵野美術大学教授 / 日本デザインセンター 代表)

「和える」というテーマに感心していた。「融合」とか「掛け合わせる」ではなく「和える」。この微妙な日本語のテーマは実に Tokyo Midtown Award らしい。ただし、このデリケートな語感を持つ「和える」の答えを見つけるのは大変だったろう。結果として見事に的のまん中を射たようなアイデアが選ばれた。このアワードもしっかり個性を發揮できるようになった。



■ 水野 学 / Manabu MIZUNO

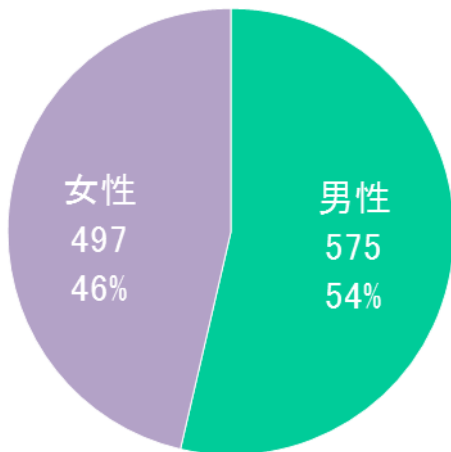
(アートディレクター / クリエイティブディレクター / good design company 代表 / 慶應義塾大学特別招聘准教授)

時代は、大きな変革期を迎えている。インターネットを介したさまざまなネットワークが隔々まで広がり、世界はととも近くなった。新しい時代、未知の技術への扉が開いている。しかし、人類はこれまでもこのような変化の時代を既に経験している。

その中でも最も大きな変革期を、仮に「Big evolution」と呼んでいる。大航海時代と産業革命は、その代表例と言えよう。これらの「Big evolution」が訪れ、大きな進歩が生まれると、やがて人々は、それに抵抗するかの如く文化を求めてきた。イタリアのルネサンスや日本の安土桃山時代、イギリスで始まったアーツアンドクラフツ運動などがそれである。人類は再び、新たな「Big evolution」の真っ只中にいる。それに反するかのように、今後一層文化が求められ、デザインの重要性はさらに高まると考えている。

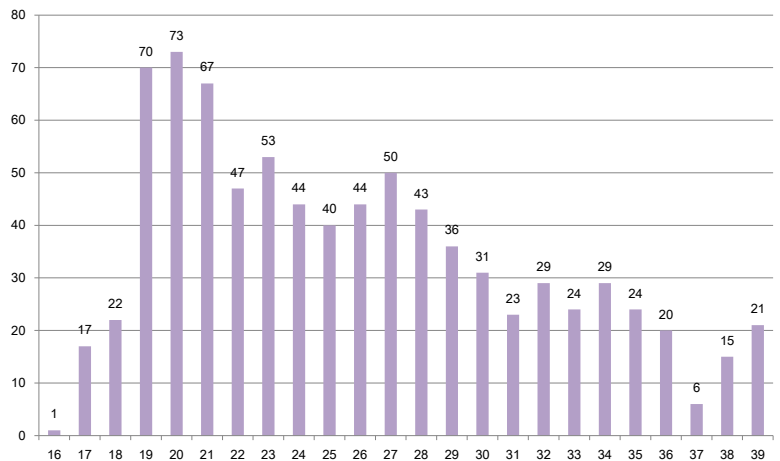
<デザインコンペ> 応募者データ

● 応募総数男女比 (件)



● 年齢分布 (件)

平均年齢 26.5 歳



■ 応募者数…1,072 名(組)

■ 傾向…今年の<デザインコンペ>は「和える」をテーマに募集し、1,072 点の応募がありました。傾向としては、昨年のグランプリ作品「MID DAY」に続く、イベントを提案する作品や、海苔や味噌といった日本ならではの食材、お菓子などに新たなデザインのエッセンスを「和えた」作品が多く見られました。